日本行動計量学会第47回大会

2019年9月4日

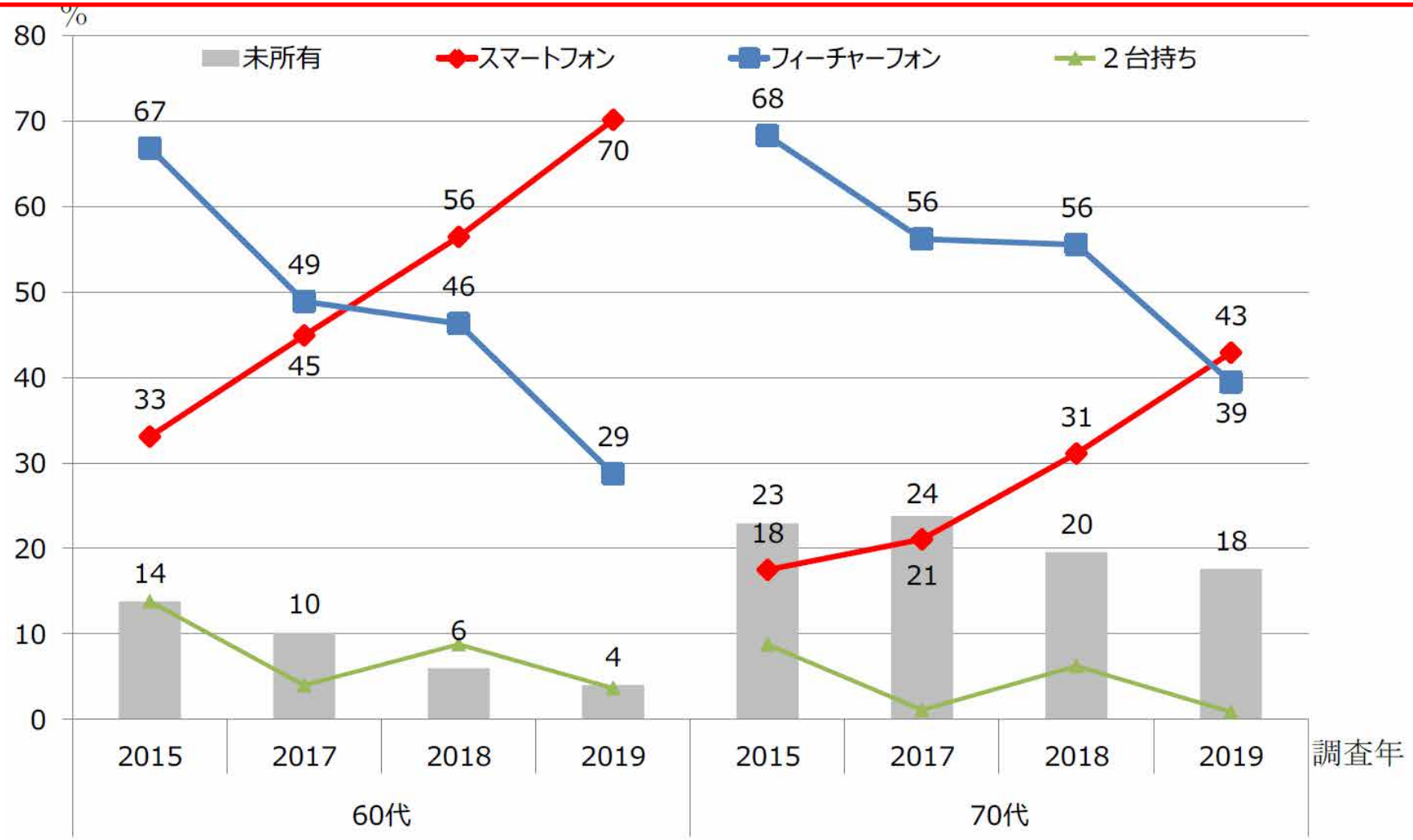
ケータイ・スマホに関するライフスタイル研究(2)
― スマホ利用によるシニアの生活変化 ―

飽戸 弘　(東京大学名誉教授)
吉良 文夫　(㈱ＮＴＴドコモ　モバイル社会研究所)
○ 水野 一成　(㈱ＮＴＴドコモ　モバイル社会研究所)

1.研究目的

1．研究の背景

スマートフォンが急速に普及が進む中で、
スマートフォンはシニアの生活にどのような変化をもたらしたのか。



※NTTドコモ　モバイル社会研究所調べ

2. 分析の目的及び調査概要

スマートフォンが急速に普及が進む中で、
スマートフォンはシニアの生活にどのような変化をもたらしたのか。

**スマートフォン所有者において、スマートフォンがもたらした生活の変化の結果を元に
シニアをグループ分けし、それぞれのグループの特性を明らかにしていく**

調査概要

1)名称　モバイル動向調査

2)調査実施時期　2019年1月

3)調査方法　web調査

4)調査対象者　全国　15歳～79歳　男女

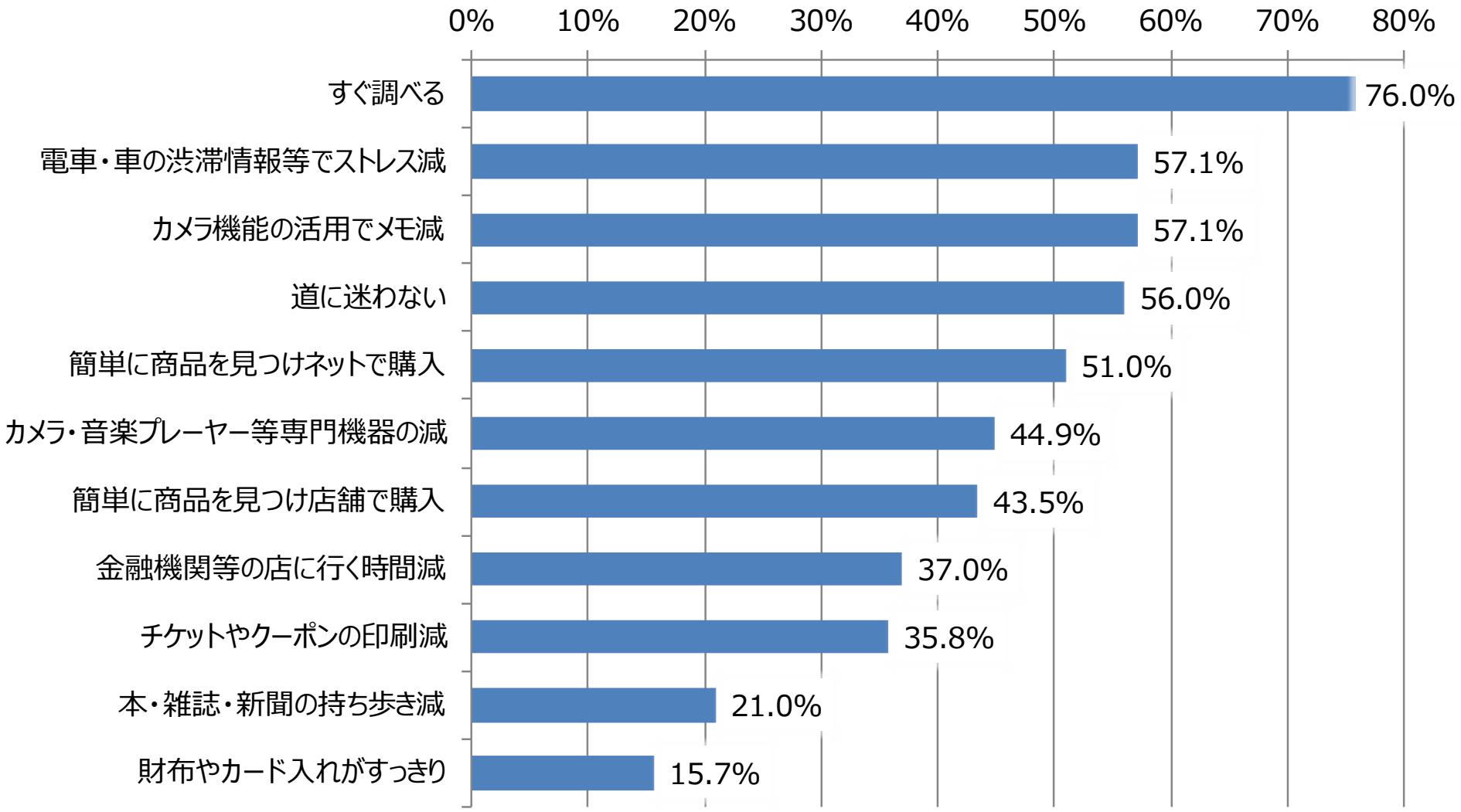
5)標本抽出方法　QUOTA　SAMPLING　性別・年齢・都道府県で割付

6)サンプル数　6,000サンプル
(分析対象は1,169サンプル・・・60代、70代のスマホ所有者)

２.調査結果及び分析
(シニアのクラスタ分け)

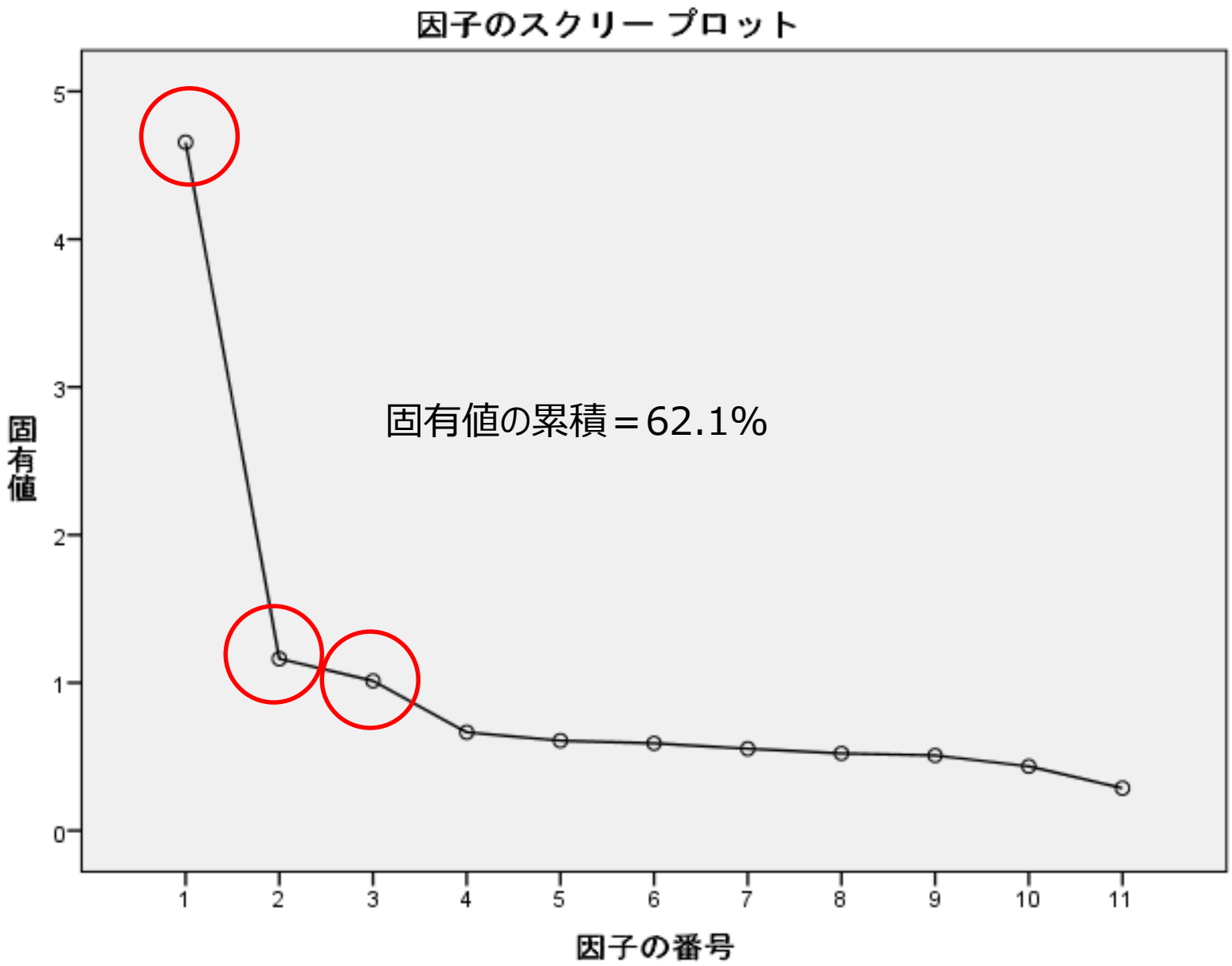
2-1. シニアのスマホ利用にする生活の変化【単集計】

Q：スマホを持ったことによる生活の変化(MA)



n=1169

2-2. シニアのスマホ利用にする生活の変化【因子分析】



2-3．シニアのスマホ利用にする生活の変化【因子分析】

回転後の因子行列[a]

	因子		
	情報	購買	ペーパーレス
道に迷わない	**.682**	.182	.247
カメラ機能の活用でメモ減	**.570**	.119	.206
電車・車の渋滞情報等でストレス減	**.542**	.376	.136
すぐ調べる	**.506**	.360	.080
カメラ・音楽プレーヤー等専門機器の減	**.437**	.244	.369
簡単に商品を見つけネットで購入	.254	**.803**	.192
簡単に商品を見つけ店舗で購入	.242	**.719**	.250
金融機関等の店に行く時間減	.260	**.435**	.353
財布やカード入れがすっきり	.087	.167	**.691**
本・雑誌・新聞の持ち歩き減	.232	.154	**.630**
チケットやクーポンの印刷減	.388	.209	**.515**

因子抽出法: 主因子法
回転法: Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

a. 6 回の反復で回転が収束しました。

2-4．シニアのスマホ利用にする生活の変化【クラスタ】

		クラスタ			
		小変化	情報活用	購買	多方面
因子	情報	-0.9	0.7	0.2	0.4
	購買	-0.7	-0.9	0.9	0.5
	ペーパーレス	-0.3	-0.3	-0.4	1.4
サンプル数		330	241	377	221
構成比		28%	21%	32%	19%

n=1169

３.数量化理論第Ⅱ類を用いた各クラスタの特性の分析

3-1. 目的変数 と 説明変数

数量化理論第Ⅱ類

【目的変数】

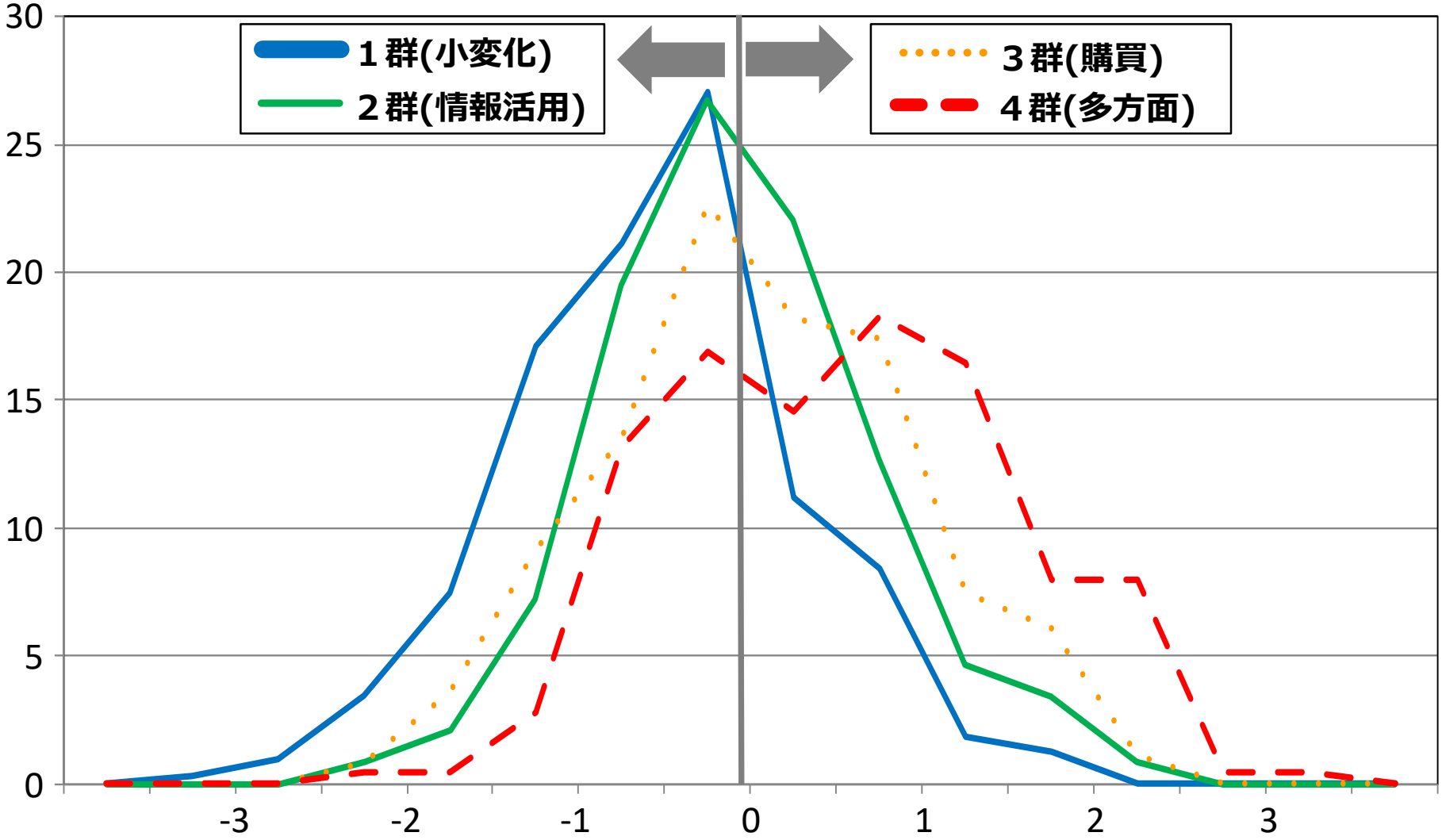
生活の変化に着目して得られた４クラスタ ①小変化 ②情報活用 ③購買 ④多方面

【説明変数】

デモグラフィック	性別
	年代
	有職無職
	都市区分
ライフスタイル	家族との交流
	仲間との交流
	イノベータ得点
	個性派同調
	経済的ゆとり
	時間的ゆとり
ＩＣＴ	ＰＣ所有
	スマホ所有時期
	スマホ所有きっかけ

3-2. 判別グラフ

１軸は判別グラフより「１群：小変化」と「４群：多方面」の違いを説明する軸とする。
なお、判別的中率は60.6%、相関比ηは0.38、寄与率は63.2%であった。



3-3. 数量化理論第Ⅱ類の結果(モデル式)偏相関係数上位

順位	アイテム名	カテゴリー名	1群:小変化← カテゴリースコア→ 4群:多方面 (-1.5 -1 -0.5 0 0.5 1)	偏相関係数
1	スマホ所有期間	１年未満 １－３年未満 ３－７年未満 ７年以上 覚えていない	−0.9 −0.3 0.3 0.6 0.0	0.20
2	所有きっかけ	能動（使いたい機能） 能動（周囲・料金） 受動（勧め） 受動（故障・何となく） その他	0.8 −0.1 −0.2 −0.3 −0.0	0.16
3	仲間との交流	行う たまに行う あまり行わない 行なわい	0.6 −0.1 −0.1 −0.4	0.14
4	イノベータ得点	高 中 低	0.6 −0.1 −0.3	0.13
5	時間的ゆとり	ある ある程度 あまりない ない	0.3 −0.1 −0.2 −0.9	0.11
6	有職無職	有職 無職	0.4 −0.2	0.11

3-4. 数量化理論第Ⅱ類の結果(モデル式)偏相関係数下位

順位	アイテム名	カテゴリー名	１群:小変化← カテゴリースコア→ ４群:多方面 (-1.5 -1 -0.5 0 0.5 1)	偏相関係数
7	都市区分	２３区・政令 ２０万以上 １０万以上 １０万未満	0.2 −0.2 −0.0 0.2	0.08
8	個性派同調	個性派 中間 同調	0.3 −0.0 −0.2	0.07
9	家族との交流	行う たまに行う あまり行わない 行なわい	−0.1 0.1 0.1 −0.3	0.07
10	ＰＣ所有	あり なし	0.0 −0.5	0.05
11	経済的ゆとり	ある ある程度 あまりない ない	−0.4 0.1 −0.0 −0.0	0.04
12	性別	男 女	−0.0 0.0	0.01
13	年代	60代 70代	0.0 −0.0	0.00

4. 調査結果のまとめ

調査結果及び考察

①以前からスマホを所有しているシニア、
スマホを所有したきっかけが能動的なシニアが「多方面」に多く見られた

⇒ 今後、「多方面」の比率が減少し、「小変化」の比率が増加する可能性

②「多方面」と「小変化」を分けた影響の中で、「人との交流」に着目すると、
「仲間との交流」の方が「家族との交流」より高い影響であった

⇒ 仲間の方が家族よりスマホの利活用に影響を与えている可能性

③デモグラフィック要素(性別・年齢)の影響は低い

最後に

今後、新たにスマホを所有するシニアは、既存ケータイの故障等、受動的な理由でスマホを所有する割合が増えることが予想される。

多くのシニアがスマホを更に活用して生活の変化を実感するようになるためには、仲間との交流やカルチャー教室・スマホ教室等を通じた習得・サポート環境づくりが大切と考えられる。